チャールズ・H・クーリーにおける コミュニケイションの機能と第一次集團

野　津　良　夫

チャールズ・H・クーリー（1864—1926）の経歴をみると，彼自身コミュニケイションについて．若いときから深い関心をもっていたことがわかる。彼は大学の修士課程を終わってから，鉄道事故防止の研究をしているし，ミシガン大学で経済学の博士論文を呈出したときも，その題目は「トランスポーテーションの理論」だった。彼のコミュニケイション理論が主として展開されているのは，1909年の「社会体制」*Social Organization* である。歴史年表をみると，アメリカでラジオの定時放送がはじまったのは1906年であるが，この本にはまだラジオはとりあげていない。今から約50年余前で，すでに電信（1833年）電話（1875年）は実用化されていた時代であるが，いわゆる当時のマスメデヤのチャンピオンとして登場しているのは新聞である。ラジオ，テレビによる現代の文化のいわゆるマスコミ文化としての特色は，すでにクーリーによって基本的な形でとらえられている。彼の思想の現代的意義は，コミュニケイションの理論を，こういう早い時期に，きわめて包括的に広い立場から展開していること，および，マスコミュニケイションに関して必ず問題となる準拠集団 Reference group の考えが，（彼はそういう用語を使っていないにかかわらず）萌芽的に見られるということであろう。本稿では，コミュニケイションを正面から問題にしている「社会体制」の方を中心にとりあげたいのであるが，この本より7年前に書かれた「人間性と社会秩序」*Human Nature and the Social Order*,1902 の中に，やはりコミュニケイションは大きな位置をしめているし，そこで問題になっている人間の「教えうる性質」Teachability という概念，ならびに「人格的観念」Personal ideas についても略説しておく必要があるであろう。

教えうる性質と人格的観念

コミュニケイションは，遺伝とならんで，人間性を形成する重要な要素である。すなわち，人間生活の歴史には2つの根源がある。1つは遺伝，すなわち動物的な流れであり，もう1つはその流れにそうて走るコミュニケイション，すなわち社会的伝達の道路である。前者は遺伝質 germ-plasm によって伝達され，後者は言語，交際，および教育によって伝達される。勿論，遺伝的要素と環境的要素は相反するものではなく，相補的，あるいは一体となって，人間の成長の中ではたらいている。遺伝的要素は，時代や生活環境によってどの程度変わるかということについて，ダーウィンの進化論は基本的にみとめながらも，あまりかわらない傾向であるという見方をしている。そうして，そのような遺伝的特質のうち，比較的本能的な段階で，人間と動物とを区別するものとして，「教えうる性質」teachability をあげている。「教えうる性質」というのは人間の柔軟な心的特性であって，たとえば動物にみられるようにはじめから生活に必要な特定の事項に向けられているのではなく，固定しない特性であって，教育することによってはじめて生活上の実用に役だつといったようなものである。クーリーはそこで動物の遺伝的特質を，数種の曲しかでない手廻しオルガンのメカニズムにたとえている。それはあまり練習をしなくてもすぐひけるが，変わった調子のものはひけない。それにくらべて人間のそれはピアノのようなもので，特定の曲をひくようになっていないが，練習すればどんな曲

でもひけると言っている。この人間の遺伝性の柔軟で固定していない性格が，人間に長期の依存的幼児期を必要し，これが家族生活の基礎になっている。一般に遺伝的本能的なものは，学ばなくてもそなわっている特定の能力をいうけれども，もっと広く解した場合には，学ぼうとする欲求がはじめからそなわっているという意味において，これこそ〝人間らしさ〟を特色づけるものであると言えよう。もし本能を固定的なものに限って考えると，それは理性とは相反するものとなるけれども，本能を柔軟性あるものまでふくめて考えるとき，それはむしろ理性に協同してはたらくものである。したがって，人間性とは，第1にこのような柔軟性のある衝動ないし能力が生まれながらにしてそなわったものであり，第2にそれは，家族とか近隣といった，クーリーのいわゆる第一次集団 primary group の親しいまじわりの中で成長して行く社会的性質をもっており，第3に，特定の場面とか制度の中で変わりうるものであり，要するにこれらの特性を一般的に表現にして言えば，「教えうる性質」ということになる。(1)

この「教えうる性質」という概念は，クーリーの社会学の体系の中で，かなり重要な基調になっている。われわれ日本人の学ぶという感覚は，言葉自体が「まねる」ということに由来しているので，模倣ということに強く結びついているが，クーリーによれば，学習は模倣から出発するのではない。幼児が大人の言葉をまねるようになる前に，意味のないかたことをブツブツ言っている時期があるように，人間の発声機関自体に，すべて内部自発性のようなものがそなわっている。だから彼は幼児の観察から次のような例を報告している。子どもに積木の仕方を教えようとして，模範をして見せた。しかるに自分が観察した限りでは子どもはことごとく無関心を示すか拒否してしまった。子どもはひとり静かにやってみようとしたが，模範を示そうとすると興味を失なってしまった。ただ子どもの学習に模倣が起こってきたのは，突如として，彼が模倣は〝近道〟と悟ったときに起こったというのである。だから，模倣といえども，子どもの内部自発性から〝選択〟されたものである。また選択と被暗示性とはよく対照されるけれども，被暗示性といえども，心的過程としては，決して単純な機械的なものでなく，ある種の選択をふくんだ多様な活動である。(2)

生まれたての子どもは，母以外のものに，あまり人間らしいものとして写らない。しかしやがて数日もすると，子どもの顔面に微笑やしかめ面や，いろいろの変化がおこり，本能的に感情表現の練習をしているかのようである。やがてこれらの表情が，特定の感情と結びつくようになり，初歩的な微笑は満足の感情と結びつく。幼児には，こうして愛といったような特殊な名前を与えるには漠然としていて柔軟ですぎるが，とにかくこうしたゆたかな能力というか社会的感情を求めているようなものがある。こうした傾向を「人なつっこさ」sociabilty と言っておこう。これは，無邪気な，あまり自意識の入らない，単純な感情であって，まだ人の顔色を解釈するというような段階ではない。しかしやがて子どもはひとりにされていても，「想像上の仲間」とこの「人なつっこさ」のよろこびを続けるようになる。ということは，「想像上の仲間」を求めることは子どもの内部ではけ口をもとめているものを何かとたしかめあいたいという最初のうごきである。このようなコミュニケイションへの衝動は，思考の結果というより，むしろ思考の重要な一部である。そうしてこのような思考や想像をそだてているものは，人格的なイメージ――すなわち，顔つき，声色，身ぶりなどである。人格的観念 personal ideas というのは，そうした外的な要素をふくめたある人間のもつ雰囲気などをすべてさしている。幼児のみる人の顔には，その後年にいたっては経験のできないほど，愛情とか真実の感じがあふれている。幼児はそうしたものを解釈 interprete することによって，親切と真実のあふれている顔の意味するはっきりした理念を把握するのである。つまり人格的観念は，そうした感覚的なものとか，そうした感情なり思想なりをあらわすシンボルからできているのである。こうした人格の視聴の対象になる部分が，

芸術的表現では主な基礎となるのである。人格的観念には，このような感覚的要素があるが，同時に感情的な要素もとなっている。しかし，大事なのは，こうした感覚的要素なり感情的要素があらわそうとしているところのものである。そういう意味では，この人格的観念は他人の心の中に入ったり，それによって自分の心を豊かにする〝橋渡し〟の役目をするものであるといえる。ワシントンで公正をおもいだし，リンカーンで親切を見いだすのもこれである。人格的観念は，小説などの想像上の人物であってもいいわけけである。そして勿論社会はこのような人物がいろいろ集まって住むところである。だから社会はこうした観念の間の関係をあらわすものであるとも言える。クーリーにとっては，社会はわれの精神内の現象であり，「我」「トーマス」「ヘンリー」「スーザン」「ブリジット」などとよばれる観念の接触や相互の影響として存在する。だからクーリーにとっては，われの意識も社会の意識も，おなじものを別の面から見たものにすぎないということになる。(3)

人格的観念は，〝まじわり〟によって発展して行くから，それとともに，他人の心に入っていったり，他人と同じ気持になる〝同情〟Sympathy も発達して行く。ただここでいう同情は，感情的なかたよりをもたない意味で使ってある。その意味では，むしろ理解というに近いかもしれない。頭痛に〝同情〟するというとき，気の毒に思う意味であって自分まで頭痛を感ずるという意味で使われているのではない。だからこの同情というのは，広い洞察というようなものを基礎においている。広いといっても，何でも無差別に〝同情〟するのではない。先ずわれわれのコミュニケイションを成立たしめるものは，類似性である。同情は類似なるものに起こる。しかし，類似性だけでは，単調であるから，相異ということが，同情のもう一つの契機となっている。その意味で，同情は特殊と普遍の両面にまたがり，人間性を発展させる媒介原理となっている。(4)

自己と社会

コミュニケイションの成立つ基礎には，自己と社会との間に，それを成りたたせる共通の基盤がなくてはならない。この点はクーリーの最も詳しく説くところである。彼の考えを，比較的図式的にあらわしていえるのは電球板の譬喩であろう。彼は自我という意識を電球のいっぱいついた板にたとえる。その電球にあかりがつくことは，そのついた形にあたる思想なり衝動なりがわれわれの意識の中に起こることである。われわれの知っている人物も，このような電球板にあらわれる図式と考えられる。それはその特色をあらわす電球の結線体系である。もし友人Aに対応するボタンが押されると，それをあらわす特定の形が壁にあらわれるし，もしそれを消してBのボタンを押すと，中には同じ電球がつくのもあるかもしれないが，前のは消えて別の形があらわれる。この壁の中心のあたりが特定の色，たとえば赤になっていて，それが壁の周辺部に行くにしたがってうすくなっている。この赤い部分が自己感情である。(5)

「社会体制」の最初の部分で，社会的精神と個人的精神とが二つあるものでないということを説明しようとしているが，以上の図式的説明は，これを理解するのに役立つ。われわれは，ある種の社会集団を考えることなしにわれわれ自身を考えたり，われわれ自身を考えることなしに社会を考えられないのだから，社会意識というものと自己意識というものはわけられない。自我と社会とは双生児のようなものである。デカルトが「われ思う故にわれあり」と言ったが，むしろ「われわれ思う故に」と言うべきであった。現に幼児に自分という意識があらわれるのは，2才以後であって，自分という意識は他人への意識と結合されるようになって生まれるのである。したがって，自己意識，社会意識，および公衆意識は，同じものをちがった観点からみたものにすぎない。(6)

クーリーのこうした考えに対し，ジョージ・H・ミードのごときは，独我論的観念論と評するのであるが，(7) 複合的な近代社会においては，

自己意識にいろいろな次元の社会意識が入りまじっているので，概念がちがうからといって，これがそれぞれ独立した客体として存在すると考えるのは，かえって現実的でなくなってくる。法律の用語の場合でも，ある用語が現実に直接対応することよりも法律的論理の都合上使用されていることがあるが，それを観念論だという者はいないであろう。クーリーの場合には，後述の「遠きものへの同情」ということを考えるのに，かえってこのように考えることの方が，すじが通ってくるようである。

第一次集団と第一次理念

個人を有機的な社会全体との関連においてながめようとするクーリーの立場からすれば，道徳の問題にしても，個人にたいして絶対的行為基準をおしつけるのは，現実的な考え方ではない。個人の徳といい罪というも，偶然的に何の関連もなく生じたものではない。それらは歴史の所産であり，時々刻々の向上しようと努力している全体の一部分である。各人は自己ならびにその周囲をよりよくしようと着実に努力しようとしているのであって，その実際の状況とかかわりのない基準を達成しようとしているのではない。したがって，真の改革というものは「同情的」ではなくてはならない。実際的な手段としては，実際の状況（シチユエイション）とその中の人を，詳細に親切にしらべ，善悪の混ったものの中から，漸進的に悪を追いだし善ととりかえるようにすべきである。罰とか罪とかいうものは，元来シンボリックなものである。罪人は罰によって社会から追われるのでなく，社会に回復されるように考えるべきである。それには，罰を行なうのは，小気味よい他人事と考えるのでなく，おなじ根源が自分にもあるのだとして自らを責めるのでなくてはならない。(8)

そこでこういう「同情」が，まず発現するのは，第一次集団 primary group である。第一次集団というのは，家族，遊び仲間，地域社会などの，顔と顔をつきあわせた親密な協力的な交わりのことであって，第一次的というのはいろいろの意味においてであるが，根本的には，社会性と個人の理想を作りあげるという意味においてである。親密であるとはいっても，第一次集団は必ずしも調和と愛の集団ではない。そこにはいろいろな自己主張や私的感情のまざった，異質的でかつ競争的な統一体である。しかしこれらの精神は，同情によって社会化され，共同精神によって訓練されるようになるのである。人間性 human nature という言葉は，下等動物よりも高級なものであり，人類社会全般に通ずる人間らしい感情，たとえば，とくに同情であるが，その同情のまじった感情たとえば，愛だの怒だの野心だの虚栄だの英雄崇拝だの，善悪の社会的判断だのをふくんでいるが，こういったものはこの第一次集団で生まれてくる。勿論これらは人間の〝仲間であること〟の中で生まれたものである。それは本能的生得的なものよりも高度であるが，諸制度を作りあげるほどの精密な理念感情の域にまでは達していない。(9)

この人間性という段階で，同情という概念がでているが，同情という概念はすでにこれまでも度々でてきているように，これらを向上させる媒介契機でもある。また彼は第一次集団に生まれるものとして第一次理念 primary ideas をあげているが，この第一次理念がまた人間性と構造的段階的にどうちがうのか，彼の叙述からは必ずしもはっきりしない。しかし，第一次概念は，「人間性自体の一部」（a part of human nature itself. *Social Organization* p. 33.）といっている点からみて，第一次集団に焦点をおいた角度から見た重複概念とみてよいのではなかろうか。それ故に，第一次理念は，所属の集団や社会による若干の差異はあるが，人類全体を通じておなじものであること，それ自体は必ずしも気持のよい正しいものではないという未熟さがあるが，気持よさや正当の理念を形成する可能性をふくんでいること，そしてそれが，同情による統制で下級な動物的状態から漸次洗練されて行く過程は，まったく人間性について叙述した場合と同じである。ただここでは，第一次集団に特有な，道徳的統一体の理念が母体になっていることが強調される。そこから，仲

間への忠実と親切,規則にしたがうこと,それから自由と個人の尊重といった理念がでてくる。そしてとくに最後のものは英米の国民にはなじみの深いものであるといっている。(10)

このような人間社会における永続的価値であるところの，第一次理念は，第一次集団に根源をもつものであるとともに，現在の人類社会の理想につながるものである。たとえば今日のデモクラシーの原理は，北ヨーロッパのチュートン族の村の生活にあとづけることができるし，またキリスト教の精神は，ユダヤの大工の家族的なサークルの中にあとづけることができる。それならどうしてわれわれは，この第一次理念をもっとうまく達成できないであろうか。それができないという理由は3つ考えられる。1つは人格的性格なり能力の弱さであるが，これは教育によってもっと強化しなければならない。これと関連しているが第2に考えられるのはコミュニケイションの問題である。第一次集団の中ではうまくできても，これを広い社会に拡大した場合には，そのコミュニケイションのあり方が適切でなければならない。そして第3の問題は，これも第2の問題に関連しているが，社会体制の問題である。議論しものごとを決定するのには，やはりルールを守ることによって有機的に考えがすすめられて行くのであるが，そういう秩序ができて行くことが必要である。しかし，大きな社会にはこういう問題が多忙なために動脈硬化状態になったり機械的になったりする危険をもっているので，たえず理性と同情を注ぎこむことによって生気あるものにして行かねばならない。(11)

コミュニケイション

クーリーのコミュニケイションに対する定義は，非常に包括的であるとともに，要点をよくおさえている。

ここでいうコミュニケイションとは，人間関係が存在し発展するためのメカニズムのことである。精神のあらゆるシンボルと，それを空間に伝え，時間的に保存する手段をいう。(12)

コミュニケイションの内容には,したがって，顔，態度，身ぶり，声の調子，言葉，文字，印刷，鉄道，電信，電話など，時間空間を征服するため人間のやっていることがすべて入るわけである。これらすべて，外的に実在するとともに精神的なものをあらわしている。ある意味では，実在するものはすべてシンボルとなりうるから何でも，コミュニケイションの媒体になるということが考えられる。しかし，これらのうち多くの人間の作ったものは，人間の心を投影したものであるし，それはまた人間に対してはたらきかけてくる。人間を進歩させるための手段でもある。また人間がそれを通じて，家族の一員，なかまの一員，社会の一員にまで形成されて行くところのものである。したがってまたこれを理解することは，社会的変化を知る最上の方法でもある。(13)

おそらく人間の顔色は，自由意志で操作する性質のものではないけれども，そこには人間の内部のものがよくあらわれている。人種的偏見，家族でのそだち，学歴，最近の意見，現代の制度が顔には精細にえがかれている。牧師さんも外からその様子をみていると，どんな職業でどんな宗派でどんな階級であるかということがわかる。これらは，いわば非自由意志的な表出であるが,人間が意図的に,自分の本能的な動きだとかさけびだとか，あるいは，自分をとりまく世界の音，形態，運動を再現して，それらにまつわる観念をよびおこそうとするときに，人工的なコミュニケイションのメカニズムがはじまるのである。まだ言葉が誕生しない前を想像すると，顔の表情だとか，音節のはっきりしない叫だとか歌，音，行動が，共感をよびおこし，単純な段階での一般的観念がおこるようにし，伝統や習慣が作られる媒体となったことが考えらる。おそらくそれらによって，協力や教育ということもおこったであろう。おそらく言葉が，コミュニケイションの媒体としては，もっとも有効なものであったろう。そして話，記録の方法は一層社会に大きな変化をもたらし

た。政府における法律，宗教における聖書，これらはみな書かれた記録であるが人間の作りあげた制度の中での必需物である。ことに現代の文化は，こうした過去の人間のなしたことを記録したものの上に成立っている。記録は人間の業績を保存したが，印刷術等の発明によって，文化は広く流布するようになった。記録は過去を保存するとともに，未来への思考を可能にする。さらに印刷術は，知識を庶民の手にとどくようなところにおくようになったから，民主々義の原動力になったと言ってもよい。（Printing means democracy, because it brings knowledge within the reach of the common people. *Ibid.* p. 75.）絵画，彫刻，音楽，建築などの芸術は，多少ちがいがあるにしても言葉であらわせるものを表現することもできるが，言葉であらわせないものを表現する上に非常に役にたっている。(14)

> クーリーは幼児の場合，コミュニケイションの方法として，まず観念があって，それからそれを伝えるために音を使うのでなく，むしろ，まず言葉があって，それが観念を黙火するのだといっている。(*Ibid.* p.69.)

19世紀の初頭以降，コミュニケイションは新しいエポックを画するほどに大きな発達をしてきた。それは機械的な面でも大きな変化であったが，むしろ大衆社会 larger mind にたいして，大きな働きをしてきた。そのおもなものを4つの項目にまとめることができよう。

1. 表現性――伝えようとする観念と感情の範囲。
2. 記録の永続性――時間の克服。
3. 速報性――空間の克服。
4. 流布性――すべての階級に到達。

ある意味でこれは，人間性の拡大，つまり自らを社会全体の中で表現する力の拡大ということができよう。これによって社会は，権威とかカストとか常習とかいうものでなく，より高度の人間能力，知性と同情とによって組織されてゆくのである。こうした変化により，人間の行動は拡大され活動的になってきた。電信電話の発達とともに，おそらく日刊新聞ほどいちぢるしい普及をしたものはないであろう。朝食の卓についた主人が，妻や子どもたちとも話をせず，自分の前に世界中のゴシップで一ぱいのスクリーンをたてているというクーリーの表現は，テレビに夢中になっている今日の社会の驚きと相通ずるものがある。しかしこれは，これまでの町角のストアやとなりとの柵ごしにとりかわしていた井戸ばた会議を，活字という堂々としたかたちに組織したまでのことである。古くからある食欲を，新しい方法で満足させているようなものである。そうなると，政治の面でも世論が作られるようになり，それがうまく構成されたものが民主々義である。プラトンからモンテスキューの時代まで，自由な国家の理想としては小規模なものでよかった。日清戦争のとき，大部分の中国人は，国が広大で戦争が行なわれていることを知らなかったといわれる。今や国際的意識が，あらゆる分野において高められなければならない時代である。われわれの関連する社会が大きくなればなるほど，コミュニケイションの任務は重大である。しかもこうした意味の疎通は，空間的に拡げられさえすればよいのでなく，過去にも拡げられ，われわれは歴史を学ぶ必要がある。現代は「過去をながめ未来を展望して大ばなし」（"large discourse, looking before and after," *Ibid.* p. 87.）をする時代である。古代の人間や未開地の人間にくらべて現代の文明人は全体の意志をよりよく交換するようになった。そのことは必ずしも友交的になったというわけではないが，他人の見地がよりよくわかるようになったという意味では同情的になったと言える。近代国家の間に敵意はあるかもしれないが，それは人間的ないしは想像上のものであって，盲目的な動物的なものではない。しかし現代のわれわれも，何か同情できるような接触で親しみを感ずるような人たち以外には，あまり関心を払わない。その点クーリーは，われわれがニューヨークやシカゴのイタリヤ人やユダヤ人の悲惨な生活の統計をよんであまり感動しないが，人間的な接触とか絵とかいったようなものでなら実感がもてるという意味のことを言っている。(15) 視覚や聴覚に訴えるコミ

ュニケイション手段が，単なる数字よりも人をうごかすわけである。

このようなコミュニケイションによる社会の変化は，はたして個人精神の独立と生産性を高めるかどうかということは，多くの人が問題にするところである。実はこの問題は，はじめに述べた現代の社会学で問題になっている準拠集団の問題とかかわりをもってくるのである。即ち彼は言う。

> ある角度からすれば，この新しいコミュニケイションは，あらゆる種類の個人性を助長するはずである。それは一定の環境からのがれて，もっと自分に同質な環境の中に，ささえを見出すことを容易にする。……たとえばある人が昆虫学にたいする天分をもっていたとする。彼は新聞や通信や集会を利用して，自分と同じ傾向の人の集団だとか同じような伝統に容易に接触することができる。このことは，宗教，政治，芸術，その他についても同じことがいえる。この文明社会では，幾分かでも同じような心をもった人がいると，彼等にとっては，精神的に結束し，おたがいにこの特性を激励しあうことが,比較的に容易である。(16)

このように，人々の接触が複雑になると，自分の直接に属する集団以外のところに，志をおなじくするものを求めてつながって行くようになる。こうした集団の壁をコミュニケイションが破って行くようになると，どんな集団もおなじような思想で塗りつぶされ，漸次一様になって行く傾向ができてくる。かっては地方によって独得の方言もあり，地方色ゆたかな服装もあった。しかし今や方言はだんだんうすれて，文明社会ではおなじような服装が流行するようになってくる。このようにして，文化のあらゆる面に一様性がみられてくるのであるが，コミュニケイションは個性を抹殺するものではないだろうか。これにたいしてクーリーは，個性というものには二通りあるという。すなわち一つは孤立した意味での個性であり，他は選択的な個性である。そして現代のコミュニケイションは，孤立的な個性は消すけれども，選択的な個性は強化する方向にむかっているというのである。たとえばこの例は都市と田舎の比較にみられる。前者は選択的個性であり，後者は孤立的個性である。(17)

選択的個性というのは広い視野の上にたつ普遍性に基づいた個性である。コミュニケイションの発達によって，われわれの生活は忙しくなり，知らなければならぬことが多くなる。そのため知識は広くなっても皮相となり深く集中することができなくなる。しかし，クーリーによればこれはいろいろな方法で阻止できるのであって，とくに教育の徹底によって救えるので，なおすことのできない欠陥とは言えないのである。しかしいろいろな刺激や緊張はたしかに多くはなってきているが，それはごく一部の現象であって，これが一般的な状況にはならないだろうとみている。(18) 要するにコミュニケイションの弊害についてのクーリーの考え方は,むしろ，楽観的であると言えよう。

社会体制

以上のようなコミュニケシイョンの発達は，社会の体制にもいろいろ影響を与えてくる。それらの問題についてはクーリーの考えをここに詳細に述べるのは本稿の趣旨ではないが，若干の問題についてふれておこう。接触と選択の範囲が広くなってきたことは，政治的に好結果をもたらすばかりでなく，あらゆる概念と自由とが増大してくる。それと同時に，個人であらゆる領域の知見を独占することはできなくなる。(19) このことは民主主義の発展のために，きわめてよいことである。しかし，真の民主主義というものは，小集団の中でよいと思われた原則——たとえば各人がその能力に応じてする自由な協力——を，大きな規模でやることである。(20) つまり，クーリーのいう社会体制は，等質的な有機体としてまとまった社会でなく，異質的なものが，それぞれの個性を発揮しつつ協力する複合的な近代社会である。したがって社会の制度にしても，ただ一つの方向に傾いてしまって柔軟

性を失なうことは望ましくない。ある狭い目的だけを達するように制度の機構がかたまると，その方が能率的になればなるほど，人間らしさとゆとりと，適応性を失なうようになってしまうのである。[21] また現代社会は，一見複雑な方向へ向かっているようであるが，基本的には一層単純で一貫性があって合理的な方向に向いているというのである。[22]

かけはなれた同調

マートンは「社会理論と社会構造」の中でクーリーの「人間性と社会秩序」の中に，すでに準拠集団の行動の考えの生まれた母胎のあることを指摘している。[23] 1902年のこのクーリーの書物では

> 子どもが両親や友だちの一番いいと思っている職業を拒絶して，芸術や科学のごとき，見知らない風変りな仕事に固執するならば，その子どもの最も生きがいのある人生は，決して彼のまわりにある人生でなくして，本やあるいはおそらくちょっとどこかで見聞した大先生たちであろう。[24]

という例をあげているが，この例では子どもが自分の属する集団にたいして同情せず，かえって遠きものに同情する a remoter conformtiy 事実を説明している。[25] すでにも述べたごとく，1909年の「社会体制」では，コミュニケイションの発達した時代における個性を論じたところで，昆虫学の研究のすきな者の例がだされたが，そうした所属集団の中での非同調は，むしろより大きな社会の要素が，小さな集団に接近浸透する可能性を説明するものであった。それがさらに1918年の「社会過程」 *Social Process* になると，次のように言っている。

> しかし家族でさえ，昔のように，何でも包括するような集団とははるかにちがったものになっているということは，指摘するまでもないことであろう。家族はもはやそれ自身の中に，個人の政治的地位をふくまない。家族はその子どもたちの結婚を統制しないし，職業をつがせたりはしない。[26]
>
> 人は自分の生活を外にむかって多くの集団に関与させ，そうしてしかも自分の中心的人格は，2つか3つの集団に集中する。[27]

こういったクーリーの考えからすれば，コミュニケイションの発達とともに，個人は特定の集団にのみ忠誠をちかい同調をするという傾向をうしなって行くであろう。もっともその遠き同調の対象というのも，広い人類社会的な性質のもののようである。いずれにせよ，マスコミの問題とともにふたたびかえりみられるようになったクーリーの第一次集団は，決して求心的感情の親和的要素だけでなく，むしろ外向的で遠きものへの同調という要素をもふくんでいることを無視することはできない。

注 (1) Charles H. Cooley, *Human Nature and the Social Order*. Glencoe, Ill.: The Free Press, Rev. ed. 1956 (lst ed. 1902). Introduction.
(2) *Ibid.*, Ghap. Ⅱ.
(3) *Ibid.*, Chap. Ⅲ.
(4) *Ibid.*, Chap. Ⅳ.
(5) *Ibid.*, pp. 131—2.
(6) Cooley, *Social Organization*, Glencoe, Ⅲ.: The Free Press, Rev. ed. 1956 (lst ed. 1909), Chap. Ⅰ.
(7) George H. Mead, *Mind, Self and Society*, Chicago : The University of Chicago Press, 1950 (1934), p. 244 n.
(8) Cooley, *Social Organization*, Chap. Ⅱ.
(9) *Ibid.*, Chap Ⅲ.
(10) *Ibid.*, Chap. Ⅳ.
(11) *Ibid.*, Chap. Ⅴ.
(12) *Ibid.*, p. 61.
(13) *Ibid.*, Chap. Ⅵ.
(14) *Ibid.*, Chap. Ⅶ.
(15) *Ibid.*, Chap. Ⅷ.
(16) *Ibid.*, pp. 91—2.
(17) *Ibid.*, Chap. Ⅸ.
(18) *Ibid.*, Chap. Ⅹ.
(19) *Ibid.*, p. 117.

(20) *Ibid.*, p. 119.

(21) *Ibid.*, p. 320.

(22) *Ibid.*, p. 418.

(23) マートン「社会理論と社会構造」（森東吾他訳），東京：みすず書房,1961，p.325.

(24) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 301.

(25) *Ibid.*

(26) Cooley, *Social Process*, New York : Charles Scribner's Sons, 1918, p. 251.

なお絶版になっている *Social Process* については，ニューヨークの古本屋に依頼して探索し送っていただいた西本洋一氏にお礼を申したい。

(27) *Ibid.*, p. 252.